

はじめに

今日ほど、住まいの本質が見失われている時代はないと思う。住宅メーカーは、高気密、高断熱、外断熱といったことが良い住宅の条件のように言う。一部の建築専門家や大学教授がそれに賛同し、国までもが法基準を作って同調している。これらのことが、果たして本当に良い建築の本質を述べているのだろうか。その前に、もっと重要なことを見落としてはいけないだろうか。

今の建築材のほとんどは、石油から作られた接着剤を使った製品である。柱、土台、梁は、木片を接着剤で張り合わせた集成材。壁には、薄い板一面に接着剤を塗って、何重にも張り合わせた合板が使われている。さらに、木を小さな木片にしたり、粉末状に砕いて接着剤で固めたパーティクルボードが、キッチンの箱や戸扉だけでなく、ドア枠、窓枠、幅木などの造作材に使われている。何千万円もする家が安物の家具と同じレベルにまで落ちているのだ。

確かに、冬にすき間風が入る家を好む人はいない。ペアガラス入りのサッシを使い、柱を壁で包む大壁の洋風の造りにして、さまざまな種類の断熱材を使うなど、気密性、断熱性の高い家が増えてきている。そういう傾向に拍車をかけるように、家のあらゆるすき間をふさいで、気密度を競う法律まで作った。

ところが、家全体が石油製品の接着剤、塗料、ビニールクロスでできているので、火災になると多量の黒煙と猛毒ガスを発し、一瞬のうちに人の命を奪う。石油建材から絶え間なく揮発するVOC (vaporized organic compound) は、人の健康を蝕み、五〇〇万人もの人々をシックハウス症候群で苦しめている。現在は、かなり改善されてきているといわれているが、いまだに辛い経験をしている人が跡を絶たない。私の身近にも、そういう方が何人もいらっしやる。

最近では外断熱工法が注目を浴びているが、これはポリスチレンフォームやウレタンフォームなどの断熱材で家をすっぽり包む工法である。こうした断熱材は燃えにくいとはいえ、石油製品そのものなのだから、火災時の危険性は非常に大きい。廃棄しても、自然に戻らないため、地球環境汚染にもつながる。果たして、こつこつ材料で造った家が「いい家」と言えるのか。

さらに、石油建材でできた高気密住宅内の空気は、有害な揮発性化学物質に汚染される心配がある。それを防ぐために二四時間換気システムが必要になる。そうしなければ、人の健康、さら

には命までもが危険にさらされる恐れがあるのだ。こういう不健康な家が「健康住宅」の名で売られている。機械の力を借りなければ室内の空気環境を守ることができない家、一年中同じ室温の家が、あなたにとって健康的だと思っただろうか。これはまるで「身体を動かさないので健康的」と言っているようなものだ。

さて、この根本的な問題を解決するにはどうすればいいだろうか。

高気密、高断熱のことを言う前に、建築に使う素材に心を配ることである。つまり、自然素材をできるだけ多く住宅建築に取り入れることだ。無垢の木、自然の石、壁には漆喰というように、数千年の歴史を持つ自然の素材を使ってこそ、真に値打ちのある「本物の家づくり」といえる。木にもピンからキリまである。ヒノキや青森ヒバのように素晴らしい香りを持ち、人の心を癒すばかりか、湿気にも強く、白アリすら寄せつけない、最も進化した木といわれるものから、米ツガ、ホワイトウッドのように白アリの食材になってしまつ木まで、いろいろある。

集材材、各種の合板、パネルなど、「木もどき」の素材が住宅建築には多用されている。これは「無垢の木」「本物の木」とは別物だということを忘れてはならない。高気密、高断熱、外断熱工法を採用したとき、人の命と健康を守るために、自然素材を使うことが、いかに大切であることを知らなければいけない。

第一部では、本当にいい家とは何か、無垢の木の素晴らしさはどこにあるのかを、できるだけ客観的に述べてみたい。第二部では、さまざまな建築工法、素材などを具体的に比較検討し、家を建てるときの参考にしていただければと思う。

神崎隆洋